

17 『天台四教儀』(最終回)

(2コマ)

みともけんよう
三友健容

立正大学名誉教授
文学博士
法華経文化研究所顧問



二千五百年ほどまえインドのゴータマ・シッダルタ(釈尊)によって始まったおしえは、因果の道理をもととした非常に合理的で分かり易いものだったが、人々の限りない悩み、苦しみなどに対応して、次第に増補され通常八万四千の法門といわれるほど多くなった。

これらのおしえはインドから西域を通して中国に伝わったが、途中で盗賊にあたり、砂嵐などに遭遇したりして多くの経典が失われ、無事たどり着いた経典だけが無秩序に漢訳されたため、どれが釈尊の真意であるのか、説かれた順番はどうであったのか分からなくなり、これらの経典の整理研究運動が起こった。

隋の天台智者大師智顛(538-597)は、この順番を五段階によって説明し仏教の究極的な到達点を円満具足した円教とした。智顛は坐禅を重んじ円教の教理を説いたが、非常に大部であり難解であった。

文化絢爛を誇った唐も907年に滅びると戦乱が相次ぎ唐末五代の戦乱で多くの典籍が灰燼に帰してしまった。中国南部の呉越の忠懿王が国を治めるかたわら『永嘉集』を読んでいたとき、「同除四住」の言葉に突きあたったが、焼失してしまった『法華玄義』の一節であること以外だれに訊いても解らなかった。そこで高麗と日本に使者を派遣し、『法華玄義』など焼失した書籍を求めたところ、高麗から諦観が多くの書籍をもってやってきて、天台山に数年留まり亡くなった。没後、遺品を納めた篋から光りを発するものがあり開けてみると、『天台四教儀』であったという。

『天台四教儀』は、仏教の入門概説書として多くのひとびとに読まれ継がれ、小論だが非常によく出来たすばらしい天台学の必読書である。しかしながら、いまやこの小論ですら正確に解説できるひとも少なくなってきた。その理由は「アビダルマを知らずして天台を語るは底抜け天台、腰抜け円頓だ」といわれるほど、アビダルマの正確な知識が必要とされ、昔から「唯識3年、俱舍8年」といって、アビダルマ(『俱舍論』)の理解には8年以上の歳月をかけた研鑽が必要とされてきたからである。

今回の講義では、名著『天台四教儀』を通して仏教の深奥な教理を、たっぷり味わっていただき、「同除四住」にも触れる予定である。

[日時] 7月4日(火) 13:30~15:00, 15:20~16:50

[テキスト] レジュメ配布

[参考書] 三友健容『天台四教儀談義』大法輪閣出版社

[受講料] 2,400円